

氏名	にし お てつ お 西 尾 哲 夫
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 484 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ジバーリ・アラビア語(エジプト・シナイ半島南部)の言語人類学的研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘      教 授 吉 田 和 彦      教 授 松 田 素 二

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、エジプトのシナイ半島南部に居住するアラブ遊牧民(ベドウィン)ジバーリ部族の言語であるジバーリ・アラビア語の言語人類学的研究である。聖カトリック修道院を中心とする南シナイ地域の部族間関係をめぐる歴史のなかで、ジバーリ部族は民族的にはアラブ化し、言語的にはアラビア語化する一方、自らの集団的アイデンティティーの指標として他者集団とは異なる民族あるいは言語的特徴を創出し、これを保持してきた。当初ジバーリ部族はラテン語の一方言を話していたが、アラブ遊牧民との言語接触を通してピジン・クレオール的なアラビア語を話すようになり、脱クレオール化の過程において周囲のアラビア語方言や都市部標準語との間で言語的な同化と異化を繰り返しながら、他のどのアラビア語方言にも在証されない言語形式を発達させていったと推定される。

ジバーリ・アラビア語の成立過程にみられる言語の同化・異化作用にあつては、当該言語の話者が属する言語共同体が他の言語共同体との間に有する社会環境が大きく影響している。そこで、先ず本論文の「第1部 言語変化と言語の社会維持機能——アラビア語方言研究から」では、アラビア語方言の言語共同体間で観察される言語接触に関する分析をもとに、二集団間の社会関係、およびそれにとまなう集団社会心理が言語変化の大きな動因となってきたことを明らかにし、社会関係を含めた言語集団の生態的屬性がいかに個々の話者の言語活動を社会力学的に律し、かつ、変化の方向を決定するかという点を言語変化への生態学的アプローチとして提起する。

次に「第2部 ジバーリ・アラビア語の記述言語学的分析」では、現地調査による言語データをもとにジバーリ・アラビア語の記述言語学的な分析を行ない、さらにジバーリ・アラビア語の系統と成立過程に関して考察を加える。また、アラビア語比較方言研究のためのジバーリ・アラビア語の分類基礎語彙を巻末に付し、音韻論・形態論・統語論・意味論の各分野に関する言語データならびに文化言語彙項目に関する民族誌的情報を提供する。

最後に「第3部 ジバーリ部族社会における他者表象の認識言語学的分析」では、ジバーリ・アラビア語における空間認識語彙についての言語人類学(あるいは認識言語学)的分析をもとに、ジバーリ部族を取り囲む環境(自然と社会)が、言語構造のみにとどまらず、これを通じて他者認識の構造にも深く関係している点を明らかにする。ジバーリ部族社会の事例を通して、アラブ遊牧民の集団構成原理や彼らの異人観を分析することは、アラブ・イスラム社会の基底にある「他者」認識の原像を解明することにつながる。

以下、第1部から第3部までの内容を順に説明する。

第1部の「第1章 文明語としてのアラビア語と言語ナショナリズム」では、イスラム文明を担うアラビア語の文明的特質を明らかにした上で、ウンマ(イスラム共同体)・国家・民族という共同体にとってのアラビア語の役割を分析する。アラビア語は三つの象徴的機能、つまり神(アッラー)の原言語としての神秘性、イスラム圏宗教関係者の共通語としての特権性、イスラム文明の媒体語としての文明性を持つに至り、近現代における中東イスラム世界では、アラブ民族主義、汎イスラム主義、国民国家的ナショナリズムが展開していく過程で、各々の主義主張が創出しようとする共同体の集団的アイデンティティーを維持する言語的指標として、三つの象徴的機能を利用してきたことを明らかにする。

次に「第2章 アラブ世界の女性語と都市部標準語」では、二言語変種併用 (diglossia) のアラビア語社会における女性語の特質を明らかにした上で、威信的语言形式をめぐる都市部女性語の生成過程を分析する。男性に比べて女性の方が威信度の高い言語形式を使用する傾向のあるヨーロッパ社会とは異なり、アラブ世界の女性は、フスハーとよばれる威信度の高い言語形式をあまり使用しないとされてきた。しかしながら実際には、教育を受けて社会に進出する女性たちが言語面での自らのアイデンティティーを示すために規範とみなす威信度の高い言語変種は、男性支配社会の規範語として位置づけられるフスハーではなくて、都市部の上流知識階級が自らの集団的アイデンティティーのために生成しつつある言語変種であることを明らかにする。

次に「第3章 遊牧民方言と定住民方言——言語的威信性をめぐる幻想」では、アラブ・イスラム文化における少数派集団 (マイノリティー) としてのアラブ遊牧民 (ベドウィン) 像を明らかにした上で、優勢な都市文化を受容する形で行われてきたベドウィンの定住化について、言語学的視点から分析する。定住民方言に対するベドウィン方言の言語的適応プロセスが、社会的・文化的動機、あるいは当該グループ内における集団社会心理的要因に影響されると、威信的语言としての都市定住民の方言に特徴的に見られる文法規則が、規則適用基準を超えて適用されるようになり、その結果、都市近郊の定住ベドウィンが使用するようになった定住民方言が、過剰なほど都市的になることを明らかにする。

次に「第4章 16~17世紀のアラビア語エジプト方言——大英図書館蔵ゲニザ文書 Or. 7768を資料として」では、大英図書館蔵ゲニザ文書 Or. 7768を言語学的に分析し、16~17世紀のアラビア語エジプト方言 (正確にはカイロのユダヤ人方言) について、主に通時的観点から明らかにした上で、ユダヤ・アラビア語の発生と系統について分析する。異文化・異民族少数派言語集団としてのユダヤ人の言語は、多数派言語集団であるイスラム教徒のアラビア語方言に社会経済的に依存しており、このため、言語的規範であるイスラム教徒の言語への同化と、民族的アイデンティティーである言語的指標保持のための後者の言語からの異化という二つの相反する作用を受けてきたことを明らかにする。

最後に「第5章 エジプト・アラビア語の Wh 疑問文の語順と語順変化——コプト語影響説の再検討」では、エジプト・アラビア語とコプト語の基本語順や話題化・焦点化などの一般的な語順をめぐる統語規則との関連で、各言語の Wh 疑問詞に関して生起環境や統語規則をシステムとして比較し、コプト語影響説の是非を検討する。ここでは、Wh 疑問文の語順変化におけるコプト語の影響は独占的なものではなく、エジプト・アラビア語の基本語順が VSO から SVO へ変化する中で、話題化や焦点化という統語規則の面で新たな統語構造が必要になってきた時に、コプト語の統語規則が当該の言語変化を促進させたことを明らかにし、エジプト・アラビア語に起った通時的な統語変化の仮説的段階を再構築する。

「第2部 ジバーリ・アラビア語の記述言語学的分析」においては、ジバーリ・アラビア語の記述言語学的分析を行なう。ジバーリ・アラビア語の分析のために用いる言語データは、すべてシナイ半島南部における参与調査によって収集したものである。

ジバーリ・アラビア語は、エジプトのシナイ半島南部に住むベドウィン、ジバーリ部族が話すアラビア語方言である。西暦6世紀にビザンツ皇帝ユスティニアヌスI世が聖カトリーン修道院を創建したとき、ボスニア (旧ユーゴスラビア南西部)、ワラキア (ルーマニア南部)、アレキサンドリア (エジプト) から二百家族余りの農奴を強制移住させて、修道院の警護や身辺雑事にあたせた。彼らの子孫が現在のジバーリ部族であるとされている。

言語の面では、移住当初はラテン語の方言を話していたらしいが、徐々にアラビア語を話すようになり、現在では独特の方言特徴を持っているものの、いわゆるベドウィン系のアラビア語方言に分類できるアラビア語を話している。アラビア語化の過程で特殊なアラビア語が発生していた可能性が非常に高く、コミュニケーションのための共通語を持たない集団間で一時的に用いられる言語であるピジンのアラビア語が生まれ、やがて特定集団の母語として定着していく過程において、不完全なものであったピジンのアラビア語を言語として十分機能させるために、どちらの言語でもない特徴や規則を持ったクレオールのアラビア語が生まれたと推定される。

「第1章 ジバーリ・アラビア語の構造と系統」では、まずジバーリ・アラビア語の言語構造の記述分析として、特にアラビア語の比較方言学的観点から重要であるジバーリ・アラビア語の言語特徴に焦点を当てながら、音韻論と形態論について記述的分析を行なう。次に、ジバーリ・アラビア語がいわゆる遊牧民的方言 (ベドウィン方言) の諸特徴を有しながら、都市部定住民方言の共通特徴も有する一方で、他のアラビア語諸方言には観察されない独特の方言特徴を有していることに

ついて、比較方言学的観点からジバーリ・アラビア語の系統の問題を議論する。北西アラビア半島方言のなかでも西部グループに属する南シナイ方言の一つであるジバーリ・アラビア語は、新たに地域方言として形成されてきた南シナイ方言の特徴を共有することで言語的同化をはかった。さらに、これと平行しながら、南シナイ地域における部族集団関係におけるジバーリ部族の社会的地位が原因となって、自らの集団的アイデンティティー保持のための言語的指標を確立するという言語生態的動因による社会的力学が働き、独特の孤立的方言特徴が発展してきたと推定される。

第1章の補遺として「ジバーリ・アラビア語の分類基礎語彙集」を本論文の巻末に付録する。ここではアラビア語比較方言研究のために考案した分類基礎語彙表をもとに、ジバーリ・アラビア語の基礎語彙について、音韻論・形態論・統語論・意味論の各分野からの関連情報を提供しながら記述する。文化語彙項目については民族誌的情報も提供する。アラビア語の中でも古代アラビア語と近い系統関係にある遊牧民方言は、定住化や都市化のなかで消滅しつつあるが、特にジバーリ・アラビア語の場合は、その起源および成立過程から判断する限り、アラビア語方言というよりも、特殊な言語環境のもとに発生した独自の言語体系を有する言語とみなすべきである。その意味で、ジバーリ・アラビア語は消滅しつつある危機言語の一つであり、ここでは同言語に関する記述的言語データを網羅的に提供する。

「第3部 ジバーリ部族社会における他者表象の認識言語学的分析」では、「第1章 問題の所在——文化的認識への認識言語学的アプローチ」で示すように、ジバーリ部族に語り伝えられている民話「立派な血をひくおこないのすぐれた人々」を文化認識論的アプローチによって読み込むことで、ジバーリ部族社会においては、個人と個人、個人と集団、集団と集団がどのような関係にあり、家族や部族といった共同体がどのように作られているのか、さらには他部族の人間や外国人などのよそ者、つまり異人がどのように扱われるのかを分析する。

先ず「第2章 ジバーリ部族の社会と歴史——地域としての南シナイの歴史と再構成」では、ジバーリ部族の暮らす南シナイ（シナイ半島南部）を一つの地域にとらえ、沙漠という自然環境、聖カトリヌ修道院や他の諸部族との関係という社会環境、さらには南シナイ地域をめぐる国際情勢や社会経済的变化のなかで、どのような集団間関係が形成され、ジバーリ部族がいかなる集団意識を持つようになったかについて、民族誌資料や歴史資料を援用しながら再構成する。

次に「第3章 他者をめぐる認知意味論的構造——空間／個人／集団関係語彙の分析」では、ダヒールをはじめとする個人間関係と集団間関係に関するジバーリ・アラビア語の語彙を分析する。さらにそのようなジバーリ部族社会における人間分類において、ジバーリ部族のくびとがシナイ半島という沙漠環境のなかで培ってきた民俗的な空間認識がメタファーとして機能していることを、認知意味論的な視点から明らかにする。

次に「第4章 他者をめぐる集団的認識——「聖者」発生の社会的・認識的メカニズム」では、南シナイ地域における「聖者」像の分析を試みる。「聖者」の起源とその呼称に関しては、何の一貫性も存在しないように見えるが、南シナイ地域内での集団関係の変化や同地域をめぐる国際的な社会経済的变化にてらしあわせながらこれを仔細にながめてみると、土地神話や儀礼のなかで、民俗的空間認識と文化的他者認識の相互干渉によるメタファーとしての「聖者」が創出され、ジバーリ部族との関係をふくめた南シナイ地域の諸部族の集団関係維持と地域編成原理のために機能していることが明らかとなる。

最後に「第5章 他者をめぐる文化的認識——アラブ・イスラム社会の異人論」では、ジバーリ部族社会という民俗社会的共同体が共有する経験や知識を実践し伝承するという意味での物語行為として語られた民話「りっぱな血をひくおこないのすぐれた人々」の分析を通して、ジバーリ部族社会における異人観、つまり文化的認識としての他者認識の構造を解明する。文化的認識としての他者認識とは、認知意味論という身体的経験を基盤とする空間認識から人間分類へのメタファー的展開という普遍的な一般原理からのみ創生するものではなく、物語（民話・神話）や儀礼といった文化的装置によって共同体全員が経験する集団的記憶として共有化される。同時にその日常実践によって言語として社会化され、その過程を通して創生あるいは再生産されていく。第5章では、ジバーリ部族社会における空間認識と人間分類の関係から析出された他者認識の構造に関する議論をもとに、言語相対的な文化的認識メカニズムに対する認識言語学的モデルによる事例研究として提示する。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、エジプトのシナイ半島南部に居住するジバーリ部族のジバーリ・アラビア語に関する現地調査に基づく言語人

類学的研究である。アラビア語シナイ半島方言は、古代アラビア半島方言の特徴を残す北西アラビア半島方言群に所属し、アラビア語諸方言の地理的分布の形成と系統関係を解明する上で重要な位置を占める言語である。特にジバーリ・アラビア語は、ラテン語系の言語話者であったジバーリ部族がアラブ化する過程で生じたピジン・クレオールの特徴をもつ言語であり、現在消滅の危機に瀕している点をも考慮するなら、本論において網羅的かつ体系的な記述がなされた意義は大きい。また、特異な民族的起源を持つジバーリ部族が集団的アイデンティティーを獲得していく過程を記述し、ジバーリ部族における文化的他者認識の構造を解明したことも重要である。この分析結果は、単にアラブ・イスラム社会の基底にある他者観や集団意識の解明に貢献するだけでなく、言語と文化の相対的關係についての独自の理論的枠組みを言語人類学（あるいは論者の言う認識言語学）の分野に提示することにもなる。

本論文は、「第1部 言語変化と言語の社会維持機能—アラビア語方言研究から」、「第2部 ジバーリ・アラビア語の記述言語学的分析」、「第3部 ジバーリ部族社会における他者表象の認識言語学的分析」の3部に分かれており、併せて11章から構成されている。また、ジバーリ・アラビア語の分類基礎語彙が巻末に付されている。本論文（和文501頁）以外に参考論文（英文332頁及び英文594頁）2点も提出されている。本論文の内容は以下の三点に要約できる。

(1) 論者は、アラブ世界における国家語の成立過程、女性語の変容過程、遊牧民の定住化による言語変化の過程などの事例分析に基づいて、集団的アイデンティティーである言語的指標をめぐる個々の人間の言語活動が、言語変化の大きな動因となってきたことを明らかにし、言語集団の生態的属性が作用していわゆる「自然な言語変化」とは異なる方向への言語変化を促すと論じている。

言語接触の研究において、言語の話者とその言語共同体の關係が言語変化に与える影響について具体的に記述された例は少ないので、他言語からの事例も含めて今後の理論的展開が期待できる。

(2) 比較方言学的観点からジバーリ・アラビア語の音韻論と形態論に関する記述的分析を行なった。さらに、ジバーリ・アラビア語が遊牧民方言と都市部定住民方言との特徴を共有する一方で、独特の方言特徴を有していることについて系統論上から議論する。南シナイ方言に所属するジバーリ・アラビア語は、方言特徴を共有することで周辺言語との言語的同化をはかった。これと平行しながら、南シナイ地域における部族集団間關係におけるジバーリ部族の社会的位置が原因となり、集団的アイデンティティー保持のための言語的指標を確立するという言語生態的動因によって、独特の孤立的方言特徴を発展させたと推定する。

ジバーリ・アラビア語の成立過程に関するこのような論者の仮説は新鮮であり、納得させられるところが多い。なお、ここに提出されたジバーリ・アラビア語の言語記述は、巻末付録の分類基礎語彙とともにアラビア語比較方言学あるいはピジン・クレオール語研究にとって貴重な資料となりうる。

(3) ジバーリ・アラビア語では、空間を三分割する。論者は、異人を意味する民俗語彙の認知意味論的分析によって、沙漠環境のなかで培われた民俗的空間認識が、人間分類のメタファーとして機能したことを提示する。さらに、民俗的空間認識と文化的他者認識の相互干渉によるメタファーによって、集団的他者認識としての「聖者」が創り出され、集団關係の維持と地域編成原理のために機能していることを明らかにする。ジバーリ部族社会における他者認識は、身体的経験を基盤とするメタファー的展開という一般原理からのみ創生するものではなく、様々な文化的装置による社会的実践を通して創生・再生産されていくことを明晰に論じており、言語相対的な文化的認識メカニズムに対する認識言語学的モデルの構築に向けての斬新な議論を行なっている。

上記3点に要約した本論文の主要な内容は、論者のこれまでの方言学的研究ならびに言語人類学的研究の成果をまとめたものであり、すでにその多くは内外の学術雑誌等にも引用され評価されている。厳密な方法論と綿密な現地調査、さらに文献学的分析に基づいて、文化人類学や認知科学における最近の知見も援用しながら、言語と社会あるいは文化の關係にせまる論者の方法は独創的であり、その記述ならびに分析の水準は高い。本論文がアラビア語方言学や言語人類学に貢献するところは少なくない。

ただし、本論文の中でジバーリ・アラビア語の統語論に関する記述や周辺諸方言との比較分析、さらに通時的データの取り扱いは必ずしも十分とは言えない。また、事例研究としては有意義であった空間をめぐる文化的認識についても、人間の空間認知システム自体の普遍性や言語普遍性の観点から検討する余地が多分にある。しかしながら、これらの不備が本論文

の価値を大きく低めることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月31日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。